

捨てる紙あれば拾う紙あり 2022

— 先天盲者の色彩感覚を知るきっかけとは —

福 岡 龍 太

When one paper dumps another pick ups 2022.
— How did you come to know the color sense of the congenitally blind ? —

Tatsuhiko Fukuoka

はじめに

筆者は最近、割と近隣に位置する社会福祉法人でも施設間の交流はほとんどないことを知った。特に今まで交流を行わなくとも運営が成り立っていたのは、複数の施設を運営する大規模法人であろうが、小さな施設の法人であろうが、一施設内で日々完結できる支援を中心に行っているからだと聞く。また、施設と関係する外部者は意外と双方を行き来していることが多いようだが、特に相手方の様子を口外することは無いと言う。支援の特性や個人情報保護の観点からも理解は容易だ。

障害¹(しょうがい)児の放課後活動の一環として、筆者は2015年⇒頃より絵画(ラクガキ)を中心とした造形活動支援を始めた。時を同じくして、成人障害者の就労支援事業所においても同様の活動を展開した。活動当初、ラクガキをするために白い紙を購入していたが、とある施設で大きなダンボールを提供してもらえるようになった。その後、活動をさせてもらえる施設は急激に増加し、そのすべてでこのダンボールを使用している。筆者が赴く施設は愛知県南部の西三河地区に拠点多く、2020年からの新型コロナウイルス感染拡大の影響で活動が一時中断するも、2022年初頭から少しずつ再開していった。目の前の障害者の今を支援することに徹している施設職員から、筆者が定期的に訪れる余暇活動の継続をできる限り行ってほしいと望む声が多い。

2021年度の本研究の経過途中報告では、処分費を支払って大量に捨てられる大きなダンボールの板材や端材を複数の福祉施設で絵画活動の材料として転化した実践経緯を明らかにした。端材を提供していただく施設の職員に着目した筆者は、活動でわかったことを以下の2点に挙げた。

- ① 見ず知らずの他者が自身の存在を知り、頼りにしてくれることで施設内に活気が生まれる。
- ② 誰かのために作業をしようとする、丁寧な活動になる。

今までごみとして端材を扱っていた職員は、それを必要としている人がいると知ったことで、処分するという意識から採集するという意識が変わっていった。それにより、職員同士で声を掛け合い、丁寧な作業を目指す現場環境が整っていった。一方、材料を提供してもらった施設では、特殊な形状の端材が各々の表現意欲をかき立てる一助となっていくのが明らかに見受けられた。本年度の研究報告は、新

たにこの活動を導入した施設で出会った、先天盲²の青年の活動状況を考察しながら、芸術支援活動の新たな発見と今後の展開予測を述べる。処分に困っていた廃材が、絵画活動は不可能だとあきらめられてきたであろう視覚障害者の表現意欲をどのように刺激するのだろうか。

I. 活動の広がり—経緯と現況—

1. きっかけ

譲り受けたダンボールを使って、あちらこちらの施設で芸術活動を行っている筆者は、8年前にこの活動を「楽画会（らくがかい）」と名付けた。活動場所は主に障害者施設を中心としているが、時おり健常者を交えたりすることもある。毎回、特に綿密な活動計画を立てることはせず、状況を見ながら少しずつ活動を理解してもらうために、細々と継続することだけを目指している。2022年2月、対面での活動が徐々に再開されるという社会の声を聞くようになった頃、名古屋市内の施設（以下MSR）より楽画会を支援計画に取り入れたいとの申し出があった。そこは身体障害者の支援に特化した長い歴史を持つ福祉法人である。MSRでは、これまで筆者はストレッチャーに横たわって生活をする少年との活動しか経験がないため、複数の身体障害者と同時に活動できるのか予測が立たない。しかし、障害者を分け隔てなく支援するためには、いつものように綿密な計画を立てることなく楽画会を始めてみるのが得策と判断した。すぐに打ち合わせを行い、4月より開催することとした。

毎月一度の楽画会が第3回を迎えた6月、初参加をした青年（以下T）がいる。がっちりとした体格で、髪も筆者同様に短髪だが、彼は筆者と同じ様相だとは全く気付いていない。職員に手を引かれ席に着いた。硬い筒状のダンボール（直径10センチ、長さ70センチ）がたまたま机上にあり、即座に「茶色のペンをください」と申し出て着色を始めた。スムーズな制作風景に視覚障害があることを疑ってしまう。でも、なぜ茶色と指定できるのだろうか。

2. わかっていることとあまりわかっていないこと

視覚障害者に対する表現活動の支援は、主に文字を基本として絵画活動にも及ぶ。指先等で触れながら認識する触図関連機器のひとつに、レーザーライターと呼ばれる筆記用具がある。特殊なセロファンにボールペン等で図や文字を書き込むと、筆跡が凸状に浮き上がってくる。描きながら即座に指先で確認できるレーザーライターは、盲学校の教具として広く普及している³。しかし使用に際して例えば、筆圧が足りないと文字が浮き上がってこなかったり、特殊フィルムがボールペンのインクを吸収しないことにより使用者の手元が著しく汚れたりするなど、その機器の特性を理解し、使用に際してコツをつかむ必要がある。【原田. 1967, 大庭. 1999, 渡辺. 2003】一方で、レーザーライターをスムーズに使用するための研究は進んでおり、音声補助によるガイドラインが文字以外の不定形な表示をする際にも有用であるという結果が見受けられる。【伊藤. 2011, 2012】視覚障害者に絵画制作や鑑賞を目的とした支援を行った先行研究を見ると、半立体のアナログ的もしくはデジタル化も併用した作品を、「触れる」という行為をもって認識するという活動が主となる。【大内進. 2006, 2009, 2010, 2011, 丹治. 2010】また、絵画に触れながら情報を聞くことで想像力をかき立てるシステム開発【井上. 2021】や、幾何学形態を正確に描けるように反復練習をする経緯の研究【明尾. 2003】なども同様に、多方面からの視点で表現の探究を目指している。このように、2000年代に入って研究発表がちらほら見受けられるようになるが、それ以前には研究というよりは、活動例を書籍等で発表することの方が一般的であったようだ。これらの触れることで認識する研究は、中途障害による失明や弱視者を対象としているものがほとんどであるが、1991年に発行

された書籍の中に興味深い報告がある。生後間もなく両眼を摘出した先天盲少女が、形を正確に描写できるようになった発達過程の記録である。当時担当した保育者や支援者は平面制作を目指し、丸（円）を描く際に始点に指を置いて、終点をそこに合わせることで丸を閉じることに成功した。そして、健常児と共に育つ環境下で絵画表現による見立て遊びが盛んとなり、やがては表情や動きのある人などを描くことができるようにまでなった⁴。

視覚障害者が芸術活動、特に絵画活動をストレスなく行うための研究が進んでいる昨今、その対象者が中途障害や弱視者であることは明らかである。しかし先天盲の少女が豊かな表現を楽しむ姿と、支援者のたゆまない努力などといった研究を目にすることは少ない。筆者は、障害者芸術支援活動を行うようになった当初から、先天盲者との表現活動に興味を持っていたが、あまりにも機会が少なく、あったとしても継続が望めなかったため、長らく研究がとん挫していた。

3. 問題意識という疑問

MSRでの楽画会に6月から参加したTについて話を戻すと、彼は第一回の参加時より色の指定をはっきり言葉で伝えていた。そして様々な色を要求して、ダンボールの筒に着色を施していく。楽画会で偶然出会ったTに対して筆者は、視覚障害者だとわかった時から色彩認識に期待をしていなかった。よって、Tの持つ色彩に対する思いがどこから発出されているのかをどうしても知りたくなくなってしまった。これは問題意識と言うより、Tの色彩認識に対する好奇心から成る疑問である。芸術活動に制限がかかっているかもしれない彼を取り巻く現況に、小さくてもいいから風穴を開けることはできるのか。

II. 新規活動にあたって

1. MSRとの話し合い

2022年度、新規に楽画会を開催した施設は、名古屋市内の中心部に位置する市内最古の福祉団体である。主に身体障害者の自立支援が目的とされており、その支援理念は現在に引き継がれている。楽画会を開催するスペースが十分確保できると判断した筆者は、担当職員と2項ずつ要件を提示した。

筆者からの要件

- ①他施設より譲り受けたダンボール等を使用して芸術活動を行う。
- ②活動を強要することなく、支援職員も気軽に参加していただく。

MSRより頂いた要件

- ①参加者が必ずしも毎回参加できるとは限らない。
- ②補助器具を使用する参加者もいるため、大きな作品は制作できない。

以上を双方理解のもと、4月より月に一度の楽画会を開催することとした。

2. 活動場所と方法

約45㎡の正方形の部屋に会議用長テーブルを2台対面で置き、4か所に配置する。通路は車いすで行き来できるように広くとった。室内灯はLED蛍光灯、室内温度は夏場23℃、冬場は26℃設定とした。活動時間は13時30分から14時45分。活動を強要することは一切せず、その時間内であれば開始も終了も参加者次第で、全く活動しなかったとしてもそれを指摘することはしない。

個々の活動スペースは固定し、A3程度に切り出した長方形のダンボール板や様々な形に型抜きされた手のひら大のダンボールの端材、45センチ程度のダンボールの筒等を数多く用意する。10メートルの

ロール紙も用意して、適宜カットして使用する。卓上で制作ができる大きさの作品を目指す。腕や手首の筋力が低い参加者には、軽量かつ着色が容易な筆先の柔らかいマジックペンを用意する。それ以外の参加者へは、通常のマジックペン（10色、細・中太芯それぞれ2本程度）を用意する。接着のために木工用ボンドを2キロ用意する。

3. 活動目的

運営母体の違う福祉施設等を行き来する筆者は、とある施設で捨てられてしまうダンボールの有効活用を起案し、2015年頃より楽画会（ラクガキを主とする絵画活動）を行っている。処分費を支払って大小さまざまな形状のダンボールを捨てていた福祉施設の関係者は、まさかそれが画材として他の施設で喜ばれるなどとは信じられないと口にしていた。しかし、この活動が地道に継続していくうちに、切り抜きの作業が丁寧になり、ダンボールの端材にもかかわらず、まるで商品のごとく箱にきっちり納めて筆者に手渡してくれるようになった。不要物だとの認識が消え、それを介した交流が新たな支援の価値観を生んでいることは間違いない。本年度は新たな交流の中で、特に絵画活動が困難とされる全盲者（先天盲者）との活動が始まった。そこでいきなり独特の色彩認識を見せつけられた筆者は、見たことがなくとも、豊かな絵画表現活動ができるという仮説を立てた。そして、そのきっかけが視覚確認以外の感覚によるものであるならば、そこに本研究の活動意義が生じる。この活動が「見たこともないのに描けるはずはない」という硬い殻に亀裂を生じさせた時、芸術支援活動の特に絵画制作に対する固定観念が、大いに揺らぐはずである。

次項では2022年4月から2023年1月までの活動記録と筆者の所見を示しながら、わずかな参加回数ではあったがTの様子に注目する。

Ⅲ. 活動結果

1. 活動報告と所見

2022年2月25日（晴れ）

9時30分よりMSRで打ち合わせ。4月より第4金曜日に楽画会を開催することを正式に決定した。13時にダンボールを提供してくれる施設へ移動する。新規活動の内容説明も兼ねて、2022年度も継続寄付をしてもらえるようお願いをした。するとさっそく、そこで使ってほしいとダンボールの端材などを大量にもらう。（写真1）

4月22日（晴れ）男性6名、女性3名

13時15分にMSRへ到着した筆者は、大型ダンボールを3枚、端材を2箱、ペニー式を持ち込む。腕の機能に障害を持っている女性へ補助器具を装着し、2名の職員が付き添う。そして軽いペンを使ってラクガキをゆっくり始める。他の参加者は、マジックペン（ポストカ）を渡すと猛烈な勢いでラクガキを始める。特に目立ったのが南米の血を引く男性（以下B）で、楕円形の端材にラクガキをして筒へ貼り付け、その筒を回転させながらそこにペンで着色する。再び端材にラクガキをして、また筒に貼り付ける。かなり精力的なループ活動が1時間ほど続いた。この様子を見た職員らは「皆さんがこんなに熱中できるとは思



写真1 端材は丁寧に箱詰めされている

わなかった」と驚いていた。たちまち15時を迎え、楽画会を終了した。

〈所見〉

筆者の自己紹介をあえて行わず開始した楽画会は、参加者に言葉による束縛を与えないことが最大の目的であった。しかし、参加者に制作を強要しないよう事前に伝えておいたにもかかわらず、「〇〇を描いて」という言葉がどこからともなく聞こえてきた。ひよっとすると誰も活動しないのではないかと筆者は危機感を感じたが、今日は初回で皆がワクワクしているのか、活発な制作が見受けられた。もし、今後も地道な継続を望むのならば、強要しない活動環境から主体的制作を引き出すために、「〇〇を描いて」と言う代わりに「〇〇を描いてみたよ」と、筆者も含めてその場にいる職員が制作する姿を参加者へ見せる状況が望ましいだろう。

5月27日（晴れ）男性5名、女性2名

筆者は12時40分にMSRへ到着。到着が早すぎたため、材料を運び込んでしばらく屋外で待機をしていた。13時30分より、様々な形状の端材を中心に机上へ並べ、楽画会を開始する。所長も参加しながら補助をしていただいた。今日の参加者は、ほぼ全員がラクガキした端材を切り出したロール紙に貼り付けていた。

「描く」→「描き終えたら貼りたい位置を職員に伝える」→「職員が木工用ボンドをつけて参加者が端材を貼り付ける」

この繰り返しを行った。活発なBは大量の楕円形の端材にラクガキをして、それを筒に幾重にも貼り付けた。初参加の大柄な体格の男性は、何事にも集中できず飽き性とのことだが、今日は1時間黙々とラクガキを楽しんでいた。他の参加者も同様に集中しながら楽しめたようで、15時に楽画会を終了した。

〈所見〉

前回制作したものが室内の壁に貼ってある。所長の許可をもらって記録写真を撮っておいた。活動を強要する言葉がけが全く聞こえなかったせいなのか、今日は静かにじっくり制作する様子を見ることができた。それにしても、端材は彼らにとって最高の素材のようだ。大きさや重さ、描きやすさ、貼り付けやすさなど、手や腕に障害があっても扱いやすいのだろう。さっそく現況報告を兼ねて、ダンボールを提供してくれる施設へ感謝を伝えた。

6月24日（快晴）男性6名、女性4名

筆者は13時10分にMSRへ到着し、大型ダンボールを降ろして入り口に向かうと、ひとりの女性が待っていてくれた。「福岡さんが来たよー」と大きな声でみんなへ知らせてくれる。ロビーにいた参加者数名も近寄ってきて、「あ、福岡さんが来た」と喜んでくれる。みんなで材料を2階の会場へ運ぶ。すぐに参加者10名が集まってきて、13時20分に楽画会を開始する。今日は、光の認識ができない先天的に全盲（先天盲）の男性Tが初参加してくれた。職員に手を引かれ着席すると、すぐに筒（大）を手にとった。右手に赤色のマジックペンを握り、描き始めたところを左手人差し指で押さえながら色を塗り始めた。2、3分ほど経過すると職員に「次は茶色をください」と申し出る。赤のマジックペンの終点を左手人差し指で押さえ直し、筒を少しずらして次の色を右手に取り、同じように着色をする。再び2、3分ほど経つと別の色を要求し、着色を続けた。ほとんどは茶色系を指定するが、たまに緑とピンクも使う。筆者はとっさに、「茶色の温度は暖かいですか？ 冷たいですか？」と聞くと、「茶色は冷たいです」と答える。同様に緑とピンクの温度を尋ねると、「緑は暖かで、ピンクも暖かです」と答える。描き終えた終点に左手人差し指を置いたため、次に塗る色に重なることがほとんどない。筒全体に着色できるまでにかかった時間は1時間ほどであった。Tも、前回参加した大柄な体格の男性同様、集中力の持続が困難な特性があるようだが、楽しい会話を交えながら長時間にわたって活動している姿が印象に残る。（写真2）

多くの参加者に、複数の異型の端材に好きなアイドルの顔や名前、キャラクターなどを描いてはそれを筒に貼る、もしくは台紙に貼るといった活動が定着しつつある。特にBは、いつもにも増して精力的な制作をしている。国旗や果物を端材に描き、気の合う職員が麻ひもでつなげて、夏祭りで展示できるようにぎやかな暖簾を作っている。あっという間に多くを完成させるために、暖簾はどんどん長くなる。言葉の交流が苦手なBは、ちらちらとTの活動を確認していた。参加者数名より、「楽しい、楽しい、今度はいつですか」と問われる。「来月は22日に来ますよ」と筆者が伝えると、自分のカレンダーにさっそく記入していた。再会の約束を交わし、15時に楽画会を終了した。

〈所見〉

今、この施設の大きな特徴は、職員すべてが参加者のしたいことを聞き出そうとしていること。そして、それを実現できるための環境を整えながら、完成した作品を無条件で尊重して、参加者との信頼関係を築こうとしていることだ。初回に気になっていた、「〇〇を作って」との言葉がけは全くなく、それを言う代わりに「〇〇がしたいのですか?」と参加者がしたそうなことを予測して聞いている。主体的な活動を引き出すきっかけを探っているのだろう。表現したい事物はもうすでに参加者の脳裏には浮かんでいるのだろうが、それを実現するための方法選択と実践は職員の支援なくしては不可能である。

Bは、楽しく制作をしているTを意識しているようだ。そしてその影響により、Bの制作がより一層精力的になっていき、作品を完成させるスピードや数が飛躍的に増えた。Tは、Bの存在や活動風景を確認することはできないため、Tの制作状況に変化は見られないが、Bの動きは明らかにTの存在で変化したと言えよう。

今回は作品を撮影する許可を得た。さっそくダンボールを提供してくれる施設へ送って見てもらおう。彼らの丁寧に切り取ってくれるひと手間が、面識のないMSRの人々の心を豊かにしていることは間違いない。本来、処分費を支払って捨てていた不要物が、貴重な資材として芸術支援環境を彩っている。(写真3)

7月22日(晴れ) 男性3名、女性1名

筆者は13時にMSRへ到着。コロナ感染状況が深刻になってきたようだが参加者は意欲的で、自ら準備をして13時15分より楽画会を開始した。Bは出席しているが、Tは欠席。今日も端材にラクガキをして、それを筒や台紙に貼る制作をしている。職員の補助も参加者それぞれに合った内容で進められているため、活動はスムーズである。Bの誕生日が2日後に迫っているとのことで、筆者は長い筒にカラフルなハートをたくさん描き、祝福のメッセージを書いた。飽き性の男性は、10分制作をして10分気分転換をするサイクルで30分程度活動を行った。本来、楽画会の活動時間は13時30分より14時45分までだが、近頃は筆者が到着するとすぐに開始し、2時間近くみっちり制作するようになってきた。



写真2 Tの作品



写真3 制作した作品はすぐに展示される

〈所見〉

楽画会で職員が行っている補助は、言葉がけに頼らないことで、安心して制作に集中できる環境を参加者にもたらしめているようだ。ついつい言葉で指示をしてしまいがちだが、それを行わないという徹底した支援体制の確立は、支援施設に限らず教育機関全般でも有用ではないか。

8月26日（晴れ）男性3名、女性3名

本日は自家用車ではなく公共交通機関を使い、筆者は13時30分にMSRへ到着する。会場では、すでに椅子に座って6名がスタンバイしている。さっそく職員と共にストックしてあるダンボールを倉庫から出し、ペンを配布して楽画会を開始する。BやTは欠席。少しずつ活動は始まるが、いつものように作品が急激に増えていかない。そこで筆者は、前日に赴いた施設でいただいたプチトマトの輪郭だけが印刷されたイラストをコピーして、黙ってさりげなく参加者へ配った。職員から「塗り絵をやってみますか」との言葉がけがあり、各々ペンや色鉛筆をもって塗り絵を始めた。13時30分から15時まで、ほぼ全員が塗り絵に集中していた。後片付けのあと、15時15分に楽画会を終了した。

〈所見〉

言葉を発することができないBの意欲的な活動は、他の参加者にとどまらず職員までにも積極的な制作を楽しみたくするような気を起こさせる。また、見て確認することができないTの意欲的な活動も、B同様に職員や参加者へ刺激をもたらす。しかし、今日は2人とも欠席だ。今日の活動ぶりを振り返ると、ふたりの存在は制作環境を活性化させるとして、改めて期待が持てる。しかし一方で、静かにゆっくり制作したい参加者もいることに気付いた。塗り絵だからかもしれないが、ほとんどの参加者が90分以上集中していた。よって今後は早急に、静かに制作できるゾーンも確保する必要があるだろう。

塗り絵のシートを配布した時、筆者はあえて何も参加者へ説明をしなかった。「塗り絵をしてください」と声をかけてしまえば、それは強要につながりかねないからである。今日の職員の言葉がけは、強要ではなく誘っているわけで、問題はないだろう。しかし、その言葉がけすらしめないという場面を増やすことができれば、参加者自らが新たな表現に気付くチャンスが広がるかもしれない。ところで、もしTが今日の楽画会へ参加していたら、塗り絵にどう対応しただろうか。

9月16日（晴れ）男性4名、女性2名

筆者は13時15分にMSRへ到着した。今日は、A 3用紙の長辺を2枚合わせたほどの大きさにロール紙を切り分けて、参加者全員へ配布した。すぐに制作が始まり、描き終えた絵を職員や筆者がハサミでカットしていった。次に、カットした絵を参加者自らダンボールに貼り付けた。具体的に何を描いているのかを他者へ伝える人が多く、職員はその発言に耳を傾け、丁寧に対応していた。筆者は、ハサミを持つことが困難であると予想される参加者に、描いた絵を自分で切ることを勧めてみた。最初は躊躇するものの、筆者が付き添うことを条件に、ゆっくりとトライすることができた。そして自ら貼り付けると、満足した表情を浮かべていた。楽画会は、にぎやかに15時まで続いた。

〈所見〉

白い紙に描くことは慣れているのだろうか、皆スムーズに取り掛かることができた。職員や筆者は、描いたものをどのあたりでカットするのかを参加者へ丁寧に聞きながら、慎重にハサミを入れた。自信をもって描いたものだからこそ、カットする位置へのこだわりが強いようだ。また、描きたいものが明確になると、他者、特に職員に対してアピールしたい欲求が高まるのも、活動が充実している証だろう。表現への自信につながるはずだ。今日はTの参加がなかったが、彼はハサミを使うことはできるのだろうか、また、使いたいという意欲はあるのだろうか。

10月28日（晴れ）男性4名、女性4名

筆者は13時20分にMSRへ到着する。40センチ四方の画用紙20枚とダンボール端材2箱を運び入れて、楽画会を開始する。車いすで生活をする男性は近頃、自分が何を描いたかを職員に当ててもらったゲームにはまっている。毎回5枚程度のラクガキに描かれるものは、生活の中で目にするものばかりだが、配電盤や電球、窓の外に見える木々などと難易度は高い。落ち着きがないという評判の男性は、たまに離席するもののすぐに戻り、往年のプロレスラーの顔を描いている。久しぶりに参加するTは、紙にマジックでラクガキをした。職員に、指定した色のペンのキャップを取って手渡してもらい、紙のほぼ中央に描いていった。描き始めに左手人差し指を置き、色を変更する直前に終点に指を置き直す。職員がペンを交換するたびに紙を少しずつ移動しても、左手の人差し指が終点を押さえているために、何度も同じ場所に色が重なってしまう。次第に紙がボロボロになっていく。紙を交換しながら5枚ほど制作をした。今回も色のイメージを温度で表現してもらった。6月の答えと全く同じであった。15時になり終了を告げると、Tは「今日もありがとうございます。楽しかったですのでまた今度」と元気に挨拶をして、職員に手を引かれ退室した。

〈所見〉

今日も職員全員は、参加者へ制作をさせる言葉がけや制作態度を過度にほめることをせず、出来上がった作品に対する感想を最小限にとどめ、自らの制作の手を止めることはなかった。

指定した色を手にしながらか紙に着色を施したTは、筒を使用した時のような活動の広がりではできなかった。自分の意思でつかみながら描く、立体物であるが故の確かな手応えがない限り、Tの作品は再びボロボロになってしまうのだろうか。筒に着色している時と比べると若干、色を指定する声に元気がなかったような気がする。

11月25日（晴れ）男性5名、女性3名

13時15分にMSRへ到着した筆者は、すぐに大型ダンボールを卓上サイズの長方形（約40センチ×60センチ）数枚にカットして、各参加者の机へ配置する。本日Tは筒に着色をした。指定された色を手渡す際に職員が、「冷たい黄色です」、「暖かな緑です」と言うと、「はい、黄色は冷たいです」などと復唱して描き出す。左手人差し指で始点や終点を確実に押さえながら筒を回転させて筒全体を塗っていった。他の参加者は各々が描きたいものを自分のペースで描いている。14時45分になり楽画会を終了した。

〈所見〉

支援する職員は、特定の参加者と一緒に活動する場合と、全体を見まわして臨機応変に支援へ回る職員とに分かれている。Tに関しては後者の職員が対応しているため、制作中は特に支援を必要としない。ペンを交換する時に、近くにいた職員が対応するような形態が定着している。それに伴い、Tの要望に様々な職員が対応するため、Tを取り巻く活動環境には活発な風が吹く。ただし、対応する職員はTの色に対する温度感覚を記憶しておく必要がある。間違っても「暖かい茶色をどうぞ」などと言ってペンを手渡してしまうと、「茶色は暖かくないです。冷たいですよ」と、きっちり修正が入る。そうすると、押さえていたはずの左手人差し指が自由になってしまい、次に描き始める場所がわからなくなってしまう。Tの制作意欲が一時途切れると表情に曇りが見え、一気に制作スピードが落ちる。このような状況に陥らないためにも、Tだけに限らずすべての参加者の精神的安定と制作意欲を維持するための条件を、職員が確実に知っておく必要があるようだ。

12月16日（快晴）男性4名、女性3名

筆者は13時20分にMSRへ到着。今までになかった異型の端材を新たに3箱持ち込んだ。クリスマス会が翌週にあるらしく、皆で飾り物を制作する。（写真4）Tはお休み。Bがさっそく端材を重ねて雪

だるまや門松を制作し始めた。いつもBに付き添う職員は近頃手際が良くなり、作品の仕上がりも出来上がっていくスピードも向上している。会話ができる参加者は、制作したものを職員へ見せて、何を描いたかを説明をしている。一方、会話が不得意な参加者は黙々と制作をするため、職員はあえて話しかけることなく、傍らで見守っている。各々が満足するペースで制作を行うと、90分はあっという間に過ぎていく。そして、まるで体内時計からの合図を一齐受信したかのように、皆で掃除をして楽画会を終了した。

〈所見〉

材料がふんだんにある場合、思い通りに描けなければ、すぐにあきらめて新しいものを手に取るであろう。しかしMSRの楽画会では、そのようなことは一切見受けられない。小さな材料ひとつにも精一杯の表現をぶつける姿が見られ、多少失敗したと本人が判断してもなかなかそれを手放さない。そして、どれも大切な作品として職員は扱っている。したがって、楽画会終了時の掃除の際には、ごみが出るのがほとんどない。職員は、参加者が手にした材料や制作物、制作意欲など、すべてを尊重する。だから確実に双方の信頼関係が強固になっていくようだ。

1月27日（雪）男性5名、女性1名

筆者は13時にMSRへ到着する。ストックしてある材料をテーブルに並べて、13時30分より活動を開始する。前回同様、Tはお休み。Bは元気に制作を始めた。楕円形の端材を使用する参加者は多く、描いた端材を組み合わせて立体物を作る者、描いたままで放置する者、大きなダンボールにそれを貼る者と様々だ。その中でもBの制作アイデアは抱負で、表現は豪快で明確だ。そして、その制作状況は他の参加者や職員へ刺激をもたらすのか、活動が瞬く間に活発になっていく。たちまち15時になり、楽画会を終了した。

〈所見〉

本日も体調不良のため欠席しているTだが、楽画会に参加する時はいつも元気よく挨拶をして会場へ入ってくる。そして制作に没頭する。その精力的な態度は、特に他の男性参加者の制作意欲を刺激する。またBも同様に、精力的でとにかく制作スピードが早い。2人が同時に楽画会へ参加する日は、激しい制作意欲が周囲にも飛び火をして室内で渦巻いている。その状況を目の当たりにすれば、芸術表現活動を行うための指導など全く無意味だと、改めて筆者は確信してしまう。周囲に迷惑をかけない活動であるならば、自発的な表現意欲を誰もコントロールできるはずはない。

2. Tに関する活動結果

MSRにおける楽画会へほぼ毎回参加する人は、男性3名、女性2名で、ここにTは含まれない。2023年1月末の段階で楽画会を合計10回開催したが、今のところTが参加した楽画会は、6月24日、10月28日、11月25日の計3回で、活動内容は筒に2回、画用紙に1回着色をしたにとどまる。どの回も積極的で、制作時に多くの言葉を発している。初回、次々と色を指定して要求する姿に、筆者は目と耳を疑った。そして驚いた筆者は、色の認識を温度に例える質問を投げかけた。その答えを社会通念に照らし合わせれば、Tの認識には若干のずれが生じている。例えば、茶色を「冷たい」と表現したことなどだ。当たり前のことだが、それを正しいか否かと議論するのはナンセンスで、見るという経験を行えないT



写真4
クリスマス会の準備が整っていく

の色彩に対するイメージは、彼独自のものだと言える。また筆者は、立体物ならば持つという行為により着色しやすいのではないかと思い付き、Tの付近にさりげなく筒を置いたことは記憶に新しい。しかし、平面である画用紙を提供した2回目の楽画会では、筒に描く時ほど口数は多くなく、出来上がった作品を見て確認する術がなくとも、本人はその仕上がりに納得していないことが口元の表情から伝わってきた。3回目の楽画会では、1回目以上に色数が増え、慣れてきたのか手元が安定しているようだった。2本の筒に共通することは、色が塗れてない部分がほとんどないことだ。左手の指で確認しながら塗り続けていることが要因だが、これが集中力のない人の作品だとは到底思えないのである。

9月16日の楽画会では、ハサミを持って自分が描いたものを切り取る作業を行った。もしここにTが参加していたのならば、ハサミという道具をどのように認識しているのかを探り出し、もし使用したことが一度もなく、切ってみたくて要望があれば大至急で対応策を講じる必要があった。よって、これは喫緊の課題となるだろう。

IV. 考察

この研究の根本には、捨てるはずのダンボールで芸術活動交流が生まれ、そこで相手への思いやりや感謝の気持ちが育まれた支援の広がり、核として存在している。そして、その支援の広がりの一例として、先天盲者の豊かな着彩と予想だにしない色彩認識に直面した筆者の驚きを明らかにした。

「これまで養護学校や施設で行われてきた芸術文化（または余暇）活動の多くは、少しでも障害を克服し、機能を回復するためのリハビリテーションの名のもとにあった」との意見がある⁵。楽画会はMSRにおいて余暇活動そのものであり、そこで制作したものをどこかのコンクールに出品することも、商品化することも今のところはない。だから、制作する高揚感や表現し終えた満足感で障害の克服を願う考えにも及ばない。しかも、参加者の機能回復やリハビリテーションを目的として行われていることもない。純粹に好きなものを好きなだけ描くこと、ただそれだけが楽画会のリアルである。

障害者の芸術活動に限らず、幼少期から我々は大人のリアリティに振り回されてきたのではないか。子どもの世界観を踏みにじる、大人の概念への警鐘が聞こえてくる⁶。もしTの「茶色は冷たい」という発言をTの状態を全く知らない他者が耳にすれば、どのような反応を示すのか。「茶色は暖かい」と聞けば、きっと色に対する感覚を温度で表現したのだと理解は早いだろうし、その表現に疑問を持つこともないだろう。しかし、それは障害者の存在や個性や人間性を無視するもので、社会通念のもとに成り立った狭い解釈が、社会のシステムや人の心を發育不良へと誘っていく。現段階におけるTの観察は始まったばかりだが、見たことがないからこそ抱く色へのイメージは、紛れもなくTの個性と言えよう。それを否定し考えを改めさせることは誰にもできない。

間接的な関わりをもつ、ダンボールを提供してくれる施設職員にTの活動報告をした時、涙ぐんで感激していた。障害の有無に関わらず人が大切にしなければならない各々の感覚を、真の個性と尊重する貴重な瞬間だと喜んでくれた。

おわりに

とは言え、楽画会はあくまでも余暇活動であり、「この域を脱しない限り、この活動が学びの場にはならないのではないか」という意見も、MSR以外の施設からちらほら聞こえてくる。「楽画会での決まり事とは？」と聞かれれば、「人に迷惑をかけない活動をする事」くらいしか筆者は思いつかない。

表現意欲が湧いた時、即座に制作できる環境を整えることが楽画会の基本であり、筆者が制作方法や技法などを教えたことは未だかつてない。ゴリラの研究者である山極寿一は、「自分と相手の知識の違いを互いに理解している状態で、知識のある方が足りない方に自分の不利益を顧みずに行うのが『教える』で、教える方が自分の利益になるような誘導の仕方をしたら、それは『利用』であって教えたことにはならない⁷⁾」と、教える行為に関わる人間関係に一定の条件があることを示唆している。個人的な関わりは多々あるだろうが、筆者が行う楽画会は参加者や職員らの知識の過不足は関係なく、皆が横一線になって制作を楽しむだけの、利害関係が全く存在しないひとときなのである。だから先天盲であるTが、元気よく色のイメージを温度感覚に言い換えて気楽に表現できたのだろう。大人のリアリティを優先した社会でTと同じ質問をしたならば、おそらく彼は「茶色ってどんな色ですか？」と聞くだろう。見たことがないから知識がない、見て認識できる人に質問をする、そうなる山極の言う「教える」が成立する。障害者の芸術表現活動は教えられて行うものでもなければ、教えられなければならないものでもない。

先行研究で示した社会交流のためのプロセスや機器の開発は、視覚障害者が自立した社会生活を目指すために技術者や指導者がその未来を担っているという証だ。そのような研究が進む中、この楽画会は自立した社会生活と並行して、豊かに生きる生活の一助を担っている。一般常識にとらわれない自由な発想は、機能しないはずの器官がまるで何事もなかったような独自の感覚を獲得し、あきらめかけていた一部の表現活動に光をもたらす。そのきっかけは凝った機器でもなく、用意周到な言葉でもなく、捨てられそうになっていたダンボールの端材と些細な日常会話である。芸術活動という大きな駒のような皿の上にいる我々は、細い中心軸に身を委ね、それぞれが知らず知らずのうちに中庸を求め合いながら、縦横無尽に動き回って可能性を模索していくのだろう。様々な特性を持った多くの人に、この皿の上へ乗って喜んでもらうためにも、Tの表現意欲をそっと見守り続けていきたい。

本研究は2022年度 新潟青陵大学短期大学部学長個人研究加速化助成金により実践している。

¹ 筆者は自身の障害者芸術活動研究のすべてにおいて「障害」と表記する。戦前まで使われていた表記を使用することで障害者との関わりに一貫性を持たせるためである。

² 先天盲：せんてんもう＝視覚経験の記憶がない乳幼児期等から視力を失っている者も含む。(早期失明)

³ 日本点字図書館附属池田輝子記念ふれる博物館「第6回企画展 日本点字図書館と触図の試み」社会福祉法人日本点字図書館, 2020年7月15日～2020年9月30日

⁴ 小泉昭男 美術教育を進める会編『人格形成と美術教育3 障害児の美術教育』あゆみ出版 1991 pp. 174-194

⁵ 松兼功『障害者に迷惑な社会』晶文社 1994 p. 153

⁶ 磯部錦司『子どもが絵を描くとき』一藝社 2006 pp. 31-38

⁷ 山極寿一『スマホを捨てたい子どもたち-野生に学ぶ「未知の時代」の生き方-』ポプラ社 2020 p. 128

参考文献

- 1) 平川幸子. 言葉で描く絵画の世界. 視覚障害: その研究と情報. 2022; (414): 12-17.
- 2) 井上真由香, 平石輝彦. 視覚障害者に対する文化的情報の提供方法に関する研究－触覚と聴覚による絵画鑑賞の試行－. 第83回全国大会講演論文集. 2021; 2021 (1): 835-836.
- 3) 伊藤史人, 今井啓二, 仁科恵美子, 工藤 滋. 音声フィードバックによる描画改善手法の評価. 研究報告ヒューマンコンピュータインタラクション (HCI). 2012; 2012(2): 1-4.
- 4) 伊藤史人. 全盲視覚障害者の音座標ガイドを利用した図形描画練習支援手法の提案. 第73回全国大会講演論文集. 2011; 2011(1): 343-344.
- 5) 大内 進. 「立版古」を活用した全盲児の触覚活用による3次元空間理解のための教材に関する開発的研究. 国立特別支援教育総合研究所研究紀要. 2011; 38 : 65-82.
- 6) 丹治達義, 柏倉秀克, 河出充展, 山田秀代. 「さわってわかる」ことを考える. 視覚障害リハビリテーション研究発表大会プログラム・抄録集. 2010; 19(0): 11.
- 7) 大内 進. 視覚障害者のためのレリーフ絵画の鑑賞におけるサイズの違いによる触覚認知への影響. 電子情報通信学会技術研究報告 = IEICE technical report : 信学技報. 2010; 110(209): 67-72.
- 8) 大内 進, 棟方哲弥, 渡辺哲也. 3次元CADを活用した全盲児のための絵画の半立体的翻案と評価. 電子情報通信学会技術研究報告 = IEICE technical report : 信学技報. 2009; 108 (406): 81-86.
- 9) 大内 進, 土肥秀行, ロレッタ セッキ. イタリアにおける視覚障害児者のための絵画鑑賞の取組. 世界の特殊教育. 2006; 20 : 83-100.
- 10) 渡辺哲也, 小林 真. 盲学校における電子レーズライタMIMIZUの評価. 電子情報通信学会技術研究報告 = IEICE technical report : 信学技報. 2003; 103(114): 7-12.
- 11) 明尾 潔. 私の経験 視覚障害者が描いた正六面体の絵画. 眼科. 2003; 45(4): 533-539.
- 12) 大庭重治, Shigeji Ohba. 視覚障害児の描画過程における筆圧調整機能. 上越教育大学研究紀要. 1999; 19(1): 337-345.
- 13) 原田政美. "盲人用レーズライター"の試作とその性能に関する実験. 東北大学教育学部研究年報. 1967;(15): 225-243.